聖三木図書館ロゴ

イエズス会のイルマンとして両手を掲げ、人々に教えを説くパウロ三木。見せしめのため、他の殉教者とともに左耳をそがれた。

発行日：2015年12月3日／発行者：荒谷 幸二郎／編集者：竹内 光／デザイン：鈴木 博文／題字：山本 廣
イエズス会聖三木図書館
〒102-0083 東京都千代田区麹町6-5-1岐部ホール内 Tel. 03-3262-0364 http://www.jesuits.or.jp/~j_seimikibun/

「過去に感謝・現在を喜び・未来に希望を」

教皇フランシスコのメッセージに触れて

教皇庁立グレゴリアン大学
教会法学部長　菅原 裕二

「奉献生活」とは

今年、カトリック教会は「奉献生活の年」を送っています。奉献生活とは修道生活の新しい呼び名ではなく、誓願を立てて神への奉仕に全面的に捧げられた生活を、隠修生活や処女（おとめ）の身分のように個人で送る人と、修道会や在俗会の会員のように集団で送る人を合わせて呼ぶために第二バチカン公会議で考案された表現です。個人で奉献生活を送る人は日本にはまだいないようですが、ヨーロッパを中心に増えています。奉献生活を送る人は世界全体で百万人ほどおり、修道者が全体の九割超を占めています。

教皇が書簡で招いた

公会議の「修道生活の刷新・適応に関する教令」の公布五十周年を記念する形で行われている「奉献生活の年」ですが、その始まりに際して教皇フランシスコは書簡を送り、「過去を感謝をもって見つめ、現在を喜びをもって生き、未来を希望をもって抱く」ようにと招きました。慈しみ深い神の恵みを生活の中に感じ取り、全能の神の摂理を世界に見るという超自然的な感覚は信仰の基本ですが、カトリック教会の信仰には歴史的な視座があるという特徴があり、教皇の招きはこうした伝統に基づいていると考えられます。

教会の過ちにも言及

イエス・キリストが公の宣教生活の初めから弟子たちを招き（マルコ三・十四参照）、「できないことは何一つない」（ルカ一・三八）はずの神が、天上の事柄の鍵を地上にいる弟子たちに委ねて（マタイ十六・十九参照）始まった教会は、この世で宣教し、人間の社会に神の国を打ち立てる使命を委ねられています。そのため教会の歩みは歴史的なものになりますが、人間が行っている宣教活動ですから限界も失敗もあります。教会が罪深いことをしてしまうこともありましたし、今もあることでしょう。現教皇も歴史上の教会の過ちに言及することがしばしばあります。

未来へ歩む勇気は「希望」

歴史の中を歩んでいくさだめがあるのですから、過去の出来事を反省することは今をよく生きることに必要で、今を真剣に生きないのは未来に対して責任のある態度とは言えません。教会は反省や真剣さという姿勢を大切にし、今、自分たちさえ幸せならばそれでよいという風潮を戒めます。同時に、教皇は過去を（反省だけでなく）喜びをもって見つめるようにと語ります。これは自分たちが（奉献生活を送る人の場合は特に創立者が）受けた恵みを思い出すことで可能になると教え、また信仰を生きている者のしるしは「喜び」であり、不確かな未来に向かう勇気を与えてくれるのはキリストの再臨に対する希望だと教えます。

教皇フランシスコは、二〇一五年一月グレゴリアン大学主催の「教会法国際シンポジウム」の最終日、バチカン宮殿謁見の間で二五〇人のシンポジウム参加者を代表した菅原裕二神父と特別謁見された。

説得力ある教皇の実践

教皇フランシスコが就任後二年半たっても人々の耳目を集め続けるのは、分かりやすい言葉で語り、模範をもって示し、各自が自分にできる事から始めることで世界を変えることができると導く確信があるからではないか、とその姿を見ながら感じます。教皇座のおひざ元で教鞭を取って十七年になりますが、現教皇が繰り返す「自分の殻から抜け出して実存的な『周辺』に赴く」、「貧しい人を訪れる」という招きは教皇自身の実践に基づいていて説得力があります。

私は大学人ですからこうした招きへの答えが教員としてのものになるのだろうと思っています。歴史的な視点を忘れないこと、抽象的な理論に流れないで、同時に大学として現実的に社会への貢献があるようにという教皇の招きは分かりやすいと同時に、日々の現場で表現するには大きな課題であると頭を悩ませるこの頃です。

【菅原　裕二師】一九五七年宮城県生れ。上智大学法学部卒業と同時にイエズス会に入会し、八七年からローマに在住、九一年司祭叙階。九八年より教皇庁立グレゴリアン大学教会法学部で教鞭を取り、二〇一三年より同学部長。

（キリシタン史ことはじめ）

潜伏キリシタンと「信徒発見」浦上四番崩れを経て信仰の自由

東京大学名誉教授　五野井 隆史

【編集部から】五野井先生の原稿は、『ゆるし』第八号から続く三部作の最終回です。第一回は、ザビエル渡来から日本人司祭誕生までのキリシタン初期の状況。第二回は『ゆるし』十号で、信徒の増加と深まった信仰、逆に禁教・弾圧の始まりまでを書いて頂きました。

潜伏組織作りで信仰維持

今年は、長崎・浦上の潜伏キリシタンがパリ外国宣教会のプチジャン神父との出会いを果たしてから百五十年になる。所謂、「信徒発見」、「キリシタンの復活」である。長崎・熊本両県は「長崎の教会群とキリスト教関連遺産」のユネスコ世界遺産への正式登録を、この節目の年にと念じてきた。

浦上と外海地方の潜伏キリシタンは、「バスティアンの予言」、「バスティアンの日繰り（暦）」及び教理書「天地始之事」を拠り所に、禁教時代を生きてキリシタン信仰を守り伝えてきた。「予言」は、「七代たてばコンヘソーロ（聴罪司祭）が黒船でやって来る」との伝道士バスティアンの言い伝えである。一六三四年（寛永十一）頃に、長崎とその近在での宣教師の活動は途絶えたようである。この年の年紀をもつ「バスティアンの日繰り」は一六三四年の太陰暦による教会暦で、バスティアンが帰国する宣教師ジワンの指導で作ったとされる。それ以降、潜伏キリシタンの帳方（組親）がこの暦を元にして毎年の日繰りを作成し、障りの日（忌み日）を繰り出した。帳役（帳方）、洗礼の授け役である水方、その週の障りの日（忌み日）を触れ回る聞役の三役が潜伏組織を維持してきた。

マリア像と納戸神

バスティアンの予言と日繰り、「天地始之事」は、一七九七年（寛政九）に五島氏が大村氏に領民の移住を申し込み、外海の黒崎・三重の農民たちが移住したときに五島にもたらされた。これで五島に再びキリシタン信仰が蘇った。イエズス会の画学舎で学んだ者が描いたとされる「雪のサンタ・マリア」像や、フランシスコ会系の「マリア十五玄義図」、また近年パリで確認された「日本の聖母」像が、祈りの場に密かに飾られて崇められていた。

一方、「天地始之事」や「日繰り帳」を持たなかった平戸・生月の潜伏キリシタンには「納戸神」があった。この保管者のご番役（親父役）は津元といわれ、その家が寄合の場所となった。同地の潜伏組織は、爺役（洗礼の授け役）、ご番役、み弟子（小組、コンパンヤの頭）からなる。イエズス会司祭指導の「被昇天の聖母の組」は、小組、大組、惣組の組織からなり、小親・大親・惣親（組親）がキリシタンを指導していた。「組・講」は慈悲の組やコンフラリア（信心会）の組と同義である。「納戸神」には、「ごぜん様」といわれる聖画や聖像「お掛け絵」、十字架の紙片の「おまぶり」、聖水の「お水」などがある。「お水」は生月島前にある聖なる中江の島の水である。

破壊から二四五年後に教会再建

開国後、パリ外国宣教会は一八六二年横浜の居留地に天主堂を建造した。長崎の大浦に天主堂が建ったのは一八六四年十二月、翌年二月十九日に献堂式が行われ、日本二十六聖殉教者に捧げられた。一六二〇年の教会破壊から二四五年目になる。三月十七日に浦上の農民十五人程が天主堂を訪ね、女性三人がプチジャン神父に「サンタ・マリアの御像」について問い、キリシタンであることを告白した。キリシタンの発見、キリシタンの復活といわれる。

信仰堅持は唯一人

一八六七年四月、彼らは死者を自葬し、庄屋に口上書を提出して檀家寺聖徳寺と絶縁した。長崎奉行が浦上の四つの「秘密教会」を急襲させたのは七月十五日の未明であった。指導的キリシタンが逮捕された。厳しい拷問により八一名が改心（棄教）した中で、高木仙右衛門一人が信仰を堅持した。彼は改心する者を、「[改心は]御主様（イエズス・キリスト）、サンフランセスコザベリヨ、又日本のまるちれす（殉教者）に…すまぬ事であれば、…スピリトサント（聖霊）のちからをもって、ともにしのぎませうと、…（仙右衛門覚書）」と励ました。

信仰の自由は明治六年

幕府は一八六七年十一月十五日に朝廷に大政奉還したが、浦上問題は明治新政府に引き継がれた。政府は、翌年七月二十日仙右衛門ら中心人物百十四名を萩・津和野・福山三藩に流罪にした。一年半後に第二回目の流罪があり、都合三、三九四名が西国二十藩に流配となった。過酷な「旅」を終えて、仙右衛門ら一、九三八名が浦上に帰るのは、禁制の高札が撤廃された一八七三年（明治六年）二月二四日後である。彼らの強靭な信仰・堅信が、外国公館・外国政府を突き動かし、「信仰の自由」獲得の原動力となった。

江上教会＝明治14年に長崎から奈留島に移住した4家族から始まった地域。信徒が40余世帯になった大正7年に地引網漁の利益を集めて建てた。世界遺産の登録候補で青い鎧戸がクリーム色の天主堂に映える。国指定重要文化財。（写真：峰脇 英樹）

声　使徒パウロの理解深めた図書館

若林 支郎（聖イグナチオ教会信徒）

聖イグナチオ教会ではブラザー・エルナンデスの週1回の信仰講座が開かれていたが、本年3月、ブラザーが教会を去られたのを機に閉講となった。私は、約10年にわたって、いわゆるヘルパーとして講座のお手伝いをした。ブラザーは「信仰はお勉強じゃない」というのが口癖で、毎日曜日のミサの手引『聖書と典礼』を教材として使っていた。その間を通じて、改めて感じたことは、新約聖書における、パウロの存在だった。

パウロを論じる場合、彼がどのような生涯をたどったかは、大きな問題です。彼の生涯、とくに宣教旅行を丹念にたどることによって、初期キリスト教をめぐる問題点が浮かびあがってくるのではないか。私はそう考え、講座のたびにシリアから始まり、アジア、マケドニアの簡単な地図をホワイトボードに書いて、皆さんと話し合った。そのかいあって、受講者の皆さんから「地図をたどることで、よりよく理解することが出来た」との声を頂きうれしく思った。

使徒パウロに関しての参考書は、教会に隣接する聖三木図書館には、多くの専門的な著作がそろっているので心強かった。私はとりわけ「旅のパウロ＝その経験と運命」（佐藤研著・岩波書店）には心を打たれた。

故郷の教会群を結ぶ巡礼路を

写真家　峰脇 英樹

教会の鐘が日常のリズム

私は、長崎県の五島列島で生まれ育ちましたから、教会は、身近な存在でした。それどころか、教会の鐘の音が日常生活のリズムでした。早朝のミサ時間、お昼、夕方には、必ず鐘が鳴っていました。私が育った新上五島町桐古里郷という小さな集落では、住民全てがカトリック信徒でした。ですから生活も行事も小さな港を見下ろす教会が中心で、学校の行事でもその後に決められていました。子供のころの移動手段は小舟か、獣道のような山道伝いでしたから、高校卒業までに行ったことのある教会は、桐教会のほか二つぐらいだけでした。

サンチャゴ巡礼から構想

そんな私が、「五島に巡礼路を作ろう！」と願うようになったきっかけは、両親との死別でした。そのころ写真学校を出た二十歳代の私は、カメラマンの助手としてスペインのサンチャゴ巡礼の取材に同行しました。そこで出逢った人たちは、リュックを背負いホタテ貝を身に付け、杖を携えて田舎の道を歩く人と、幸せそうな笑顔で迎える村人でした。この様子を毎日見て、「こんな巡礼路が、故郷の五島にあれば…」、私の親を失った心を癒してくれるだけでなく、訪れる人も癒され、幸せになれるだろうと確信しました。

まず、五島を見て回ることにしました。幸い五島の教会を結ぶ道は整備されていて、歩いても車でも回れました。一度ならず何度も訪れて写真に撮りました。明治時代の住民・信徒が自分たちで資材を運んで建てた教会や、上五島だけで二九か所ある教会を全て巡りました。下五島・福江島ももちろん訪れました。長崎の外海地区や平戸などキリシタン関連の地区へも足を延ばしました。

桐教会＝江戸時代に長崎・外海から移住し迫害に耐えた信徒が、明治期に五島地域で信仰を復活させた中心地。若松瀬戸に面した赤い屋根が印象的だ。雨上がりに見事な虹がかかった。（写真：峰脇 英樹）

頭ヶ島教会＝全国でも珍しい石造りの教会。大正八年に完成した国指定重要文化財で世界遺産の候補。明治六年の信仰自由化直前に、同島の信徒十数人が激しい迫害・弾圧を受けた。教会の前の海辺にキリシタン墓地が広がる。（写真：峰脇 英樹）

大自然に包まれた信仰

それらの教会が、スペインなどヨーロッパの豪奢な大聖堂のような荘厳さはなくても、また頭ヶ島天主堂のように国の重要文化財になっている教会であろうとなかろうと、その教会に集う人々の心の中には、同じように信仰が生きています。

それを脇から、五島の人々、美しい小さな入り江や五島の紺碧の海、大きな自然が包んでくれています。その中にいる自分が生まれ変わるような気がしてきます。私は、「もう一度五島を訪れたい！」と皆様に思っていただけるような写真をこれからも撮り続けることが、私自身の巡礼であり、巡礼路作りなのだ、と考えています。それが世界遺産になるなら、どんなに素晴らしいか・・・。

近頃、聖三木図書館でよく読まれている本　2015年10月

日本人とキリスト教の奇妙な関係	菊池章太著	KADOKAWA
存在の根を探して：イエスとともに	中川博道著	オリエンス宗教研究所
霊性の哲学	若松英輔著	KADOKAWA
井上洋治著作集	井上洋治著	日本キリスト教団出版局
信仰の遺産	岩下壮一著	岩波書店
実践する神秘主義：普通の人たちに送る小さな☒	イヴリン・アンダーヒル著	新教出版社
希望の光：危機を通して、救いの道へ☒	英隆一郎著	オリエンス宗教研究所
『銀河鉄道の夜』と聖書：ほんたうのさいはひ☒	捫山義次著　☒	キリスト新聞社
恵みを受けとめるヒント：いのり・ひかり・みのり☒	中井俊已著　☒	ドン・ボスコ社
救われるのは誰か	粕谷甲一著☒	女子パウロ会
祈りのともしび：2000年の信仰者の祈りに学ぶ	平野克己編	日本キリスト教団出版局
秘跡・聖霊のたまもの・教会：教皇講話集	教皇フランシスコ著	カトリック中央協議会
＊おすすめの新刊＊		
幸せはあなたの心が決める	渡辺和子著	PHP研究所
神父と修道士と宣教師たち	大山悟ほか共著	女子パウロ会

聖三木図書館から

【お知らせ】

◎冬休みの長期貸出について
十二月二十三日（水）～一月五日（火）までのクリスマス休暇及び冬期休館に伴い、十二月二日（水）から長期貸出を始めます。休館中の返却は入口の返却ポストへ。

◎開館時間は次の通りです。
月～土　十一時～十八時
日　　十時　～十七時
休館＝木曜、月末の館内整理日、祝日、年末年始、夏期休暇

【友の会からのお願い】

聖三木図書館友の会の継続更新をお願いいたします。更新手続きと会費の納入はカウンターにて受付けます。

◎年会費＝一般三〇〇〇円、学生一〇〇〇円、賛助会員一〇〇〇〇円

◎年会費は、銀行口座・ゆうちょ口座からの自動払込みをご利用いただけます。

◎年会費をお振込みで納入される場合
みずほ銀行四谷支店　普通預金
口座番号　二115848
口座名義　イエズスカイセイミキトショカントモノカイ

＊お名前の後に会員番号をお書きください。

◎新規入会の手続きは随時カウンターで受付けております。本人確認のための書類（運転免許証・保険証など）、学生の方は学生証をご提示ください。

長崎の教会群を巡礼して

随筆家　湯川　千恵子

巡礼中の湯川氏（左）と長女の平尾教授

「百聞は一見に…」

上智大学カトリックセンター主催『長崎の教会群巡礼』の企画を長女のメールで知り、充実したスケジュールと娘との同行も嬉しくてすぐに申し込みました。

長崎の教会群巡礼は、余りに素晴らしくて一言では伝えきれません。しかし「百聞は一見にしかず」で、初めて訪れた長崎や五島列島がとても身近になりました。

まず驚いたのは、教会が多いことです。それだけ人々の生活に信仰が溶け込んでいる土地柄だと実感しました。私たちは五島列島で十、長崎周辺で四の教会を巡礼し、たくさんの教会を回ったと思いましたが、ガイドブックによれば五島列島だけでも五十一も教会があり、巡礼出来たのはほんの一部でした。

日本のカトリックの故郷

五島列島の教会群は、青い海辺や緑に覆われた入り江の山頂に建っていて、どれも遠くから見ると一幅の絵のように美しく、近づくと白いレースのような彫りのある木造だったり、堅固な煉瓦造りだったり、ノアの箱舟の形だったり・・・。聖堂内の造りも個性的で、実在した漁師や長崎大司教、主任司祭をモデルにしたステンドグラスもあり、各教会を造った人々の教会作りへの意気込みに親しみを感じました。

それぞれの教会にそれぞれ美しいマリア像が安置されていて、心が安らぎました。やっぱりここは日本のカトリック信仰の故郷・聖地だとの思いを強くしました。

レンガを背負って運び建てた教会

特に心に残ったのは、赤い煉瓦造りの「青砂ヶ浦教会」です。設計・施工は鉄川与助氏。外国からの原書を基に教会建築を勉強して建てたという教会は、ヨーロッパの教会かとみまがうほど威風堂々と落ち着きのある外観で、アーチ状の入り口や白く縁取られた長方形の窓が左右対照に赤煉瓦に映えています。カラフルなステンドグラスや入り口上部の丸いバラ窓も美しく、聖なる雰囲気に満ちています。信徒たちが小高い建設現場まで煉瓦を運び上げて造ったとか。縄で縛った煉瓦を背負い、島の坂道を登る日焼けして汚れた顔の老若男女の写真をみて、本当にこの人たちの労働奉仕で建てられた教会なんだ！と深く感動しました。ちょうど日曜日で、主日のミサに与かり、時を超えて、この教会を作った方たちと同じキリストの御体、「いのちのパン」を拝領した感激は、今も忘れられません。

青砂ヶ浦教会＝5年前に献堂100年を迎えた堂々とした天主堂で国指定重要文化財。白いマリア像がマッチする教会は、50世帯ほどの信徒が総出でレンガを奈摩の浜から担ぎ上げて建てた。（写真：峰脇　英樹）

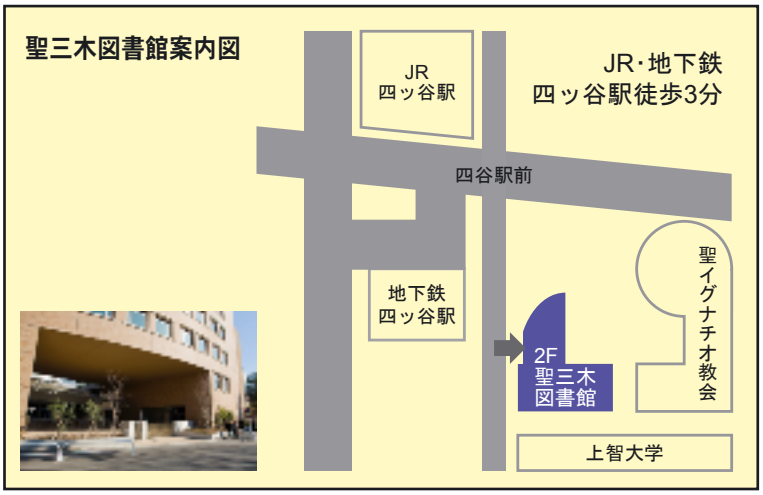
ひたすら信じ祈った人たち

次に感じたのは、古キリシタンの人たちやその子孫の方々の純粋で一途な信仰心です。宣教師によってはるばる伝えられたカトリックの教えを、弾圧で指導司祭もいない中、二五〇年間もひたすら守り、伝え続けたことは奇跡です。マリア観音や貝殻の模様に十字架を見て祈った人たちの遺品を見て、禁教令の中、キリストの教えを信じて生きた人たちの信仰心に感じ入りました。大浦天主堂での「信徒発見」の話は何度聞いても感動します。その後の浦上四番崩れの弾圧による拷問や流転に耐えて帰還した方々が貧困の中で教会を建て、愛の信仰共同体を作り上げたこと、その子孫たちも食べ物にも事欠く中で教会を守り続けていることを想う時、彼らの信仰を支え、励まし、慰めと喜びを与え続けた神のいのち・聖霊の生きたはたらきを強く感じました。私の未熟な信仰も強められる気がします。

友の会のシンボル、ネモフィラ

ネモフィラの花は、四月から五月にかけて茨城県の国営ひたち海浜公園でも、東京・立川の国営昭和記念公園でも見事に群生して周りを青く染め上げる。しかし、一本だけ見ると、五弁の花びらが底を白く彩っている。実に可憐で花言葉『ゆるし』もうなずける。（大分県中津市耶馬渓の「青の洞門」付近で撮影）

ぜひ世界遺産登録を

最後に想うのは、五島列島が過疎化して人口が激減する中、先祖から受け継いだ歴史ある美しい教会群の維持管理が容易ではないという現実です。世界遺産に登録されるのを願いながらも、世俗化を憂う声も聞かれます。自然環境の保全も担保した上で世界遺産に登録されて、多くの人が訪れて教会群のすばらしさに触れ、脈々と流れるキリストの愛の心が伝わってゆくことを心から願います。

【湯川　千恵子氏】 一九三五年高知県宿毛市生まれ。還暦過ぎてアメリカ留学。ミシガン大学大学院卒業（ＭＳＷ取得）。著書に『私は二歳のおばあちゃん』、『おてんばちいちゃんの夏休み』、『てのひらのしあわせ』など。三五年余り「心のともしび」ラジオ原稿レギュラー執筆中。長女・平尾桂子氏は、上智大学大学院地球環境研究科教授。